

『国立台南芸術大学 アーティスト・イン・レジデンス レポート』

武村 和紀

滞在期間：平成 29 年 2 月 10 日～3 月 10 日

国立台南芸術大学については、昨年に滋賀県陶芸の森に招聘作家として滞在した際に、複数の作家からそのレジデンスについての話題を耳にしました。知人作家も複数滞在した経験があり、予てより興味のあった施設です。今回が私にとっては初めての海外でのレジデンスであったため、言語の問題など不安もありましたが、担当の教授を始め、学生たちも非常に親切で、わからないことがあれば直ぐに質問出来る恵まれた環境でした。

滞在初日、関西国際空港から高雄国際空港に到着すると、陶芸の森に滞在中に出会った友人の学生が空港まで迎えにきてくれました。初日から制作を開始することが出来ました。大学院生たちと共同のスタジオで、24時間好きな時に使用することができます。私が訪れた際には12名ほどの学生が同室で制作していました。台湾人だけではなく、韓国、シンガポール、スペインなど海外からの留学生も数名受け入れておりました。定期的に海外のレジデンス施設とも交流を図り、アーティストを受け入れているようで、作風や作陶に関する考え方、用いる技法も様々であり、同じスタジオで制作する中で刺激になることも多かったです。

私の滞在した時期は大型の穴窯での焼成を控えており、学生たちの多くがそのための輶轆挽きに奮闘しておりました。薪窯での焼成に興味を持っている学生が多く、台南市街のギャラリーでも薪窯で焼成された焼き締めの食器類を頻繁に見かけました。輶轆成形の技術はあまり高いとは言えませんでしたが、手捻りの土の重ね方が日本とは異なり、非常に高い技術を持っているように感じました。

粘土はアメリカや日本からの輸入品の粘土を使用しているよう、私は滞在期間が29日間と短かったため、大学で既に用意されていたアメリカ産の粘土を使用しました。非常に扱いやすく、収縮の少ない粘りの強い粘土でした。70センチオーバーの螺旋形の作品を二週間ほどで成形し、日本でならば10日以上かけて乾燥させたいところを4日間で乾燥させましたが、目立つ傷もなく完成まで行き着くことが出来ました。

窯場にはガス窯、電気窯とともに大小様々な種類が設置されており、様々な焼成方法に対応しています。共同の原料や釉薬は複数あり、それらを自由に使うことができました。滞在期間の都合上、釉薬のテストをする時間もなく、私は既製品の釉薬を使用しました。

宿泊施設は学内にあり、スタジオから徒歩約10分です。2年前に完成した新しい建物で、内装も広く美しく、家族でも宿泊できる仕様となっていました。

食事は外食が多く、近隣の街まで毎晩の様に学生たちが連れて行ってくれました。食事は学生たちと様々な会話を交わし親交を深めることが出来る大切な場でもありました。金曜の夜にはナイトマーケットが開催され、多くの屋台が立ち並び、台南ならではの食事を

堪能することも出来ました。

滞在終盤、同時期に滞在していた藤田真理乃さんとアメリカの大学からの交換留学生との3名で、同大学と長榮大学の2大学でスライドレクチャーを行いました。英語が不得意なため、偶然出会うことが出来たファインアートを専攻している日本人留学生の方に通訳して頂きました。陶芸専攻以外の学生や教授陣も訪れ、1人当たり30分ほど写真を交えながらトークし、質疑応答も行いました。外国の方にも理解可能な表現を選択し説明しなければいけない環境の中で、逆に自分に対する理解も深まったと思います。

滞在最終日に、完成した作品を最寄りの郵便局よりEMSを利用して発送し、破損もなく日本に届けることが出来ました。制作した作品のうち1点は、台湾の基金へ寄贈となりました。

最後に、今回の国立台南芸術大学でのアーティスト・イン・レジデンスを通して本当に沢山の人々と出会い、親切にして頂きました。設備面や道具類、材料類の多さでは信楽には到底及びませんが、異国の地での限られた時間の中で様々な新たな価値観と出会い、改めて自分の作品を見詰め直すための貴重な機会になったと思っております。当初は自分の英語力不足で戸惑うこともありましたが、「陶芸」という共通の話題を通して親交を深めることが出来ました。

陶芸の森をはじめ、日本のレジデンス施設への留学に興味を持っている学生も多く、今後日本で再会できることが非常に楽しみです。また私自身も再び台南を訪れることが出来たらと思っております。